

# American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見てくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第39回

## ボズ・スキヤッグス 「ロウダウン」

悪女にはまってしまった友人を諭す



Boz Scaggs  
"Silk Degrees"  
Columbia OPC33920 [1976] →  
ソニー ©MHCP1291

俺は1975年、76年とサンフランシスコからゴールデン・ゲイト・ブリッジを渡ったところにあるマリン・カウンティに住んでいた。その頃、ボズ・スキヤッグスはすでに大スターだった。サンフランシスコ・エリアではたくさんライブをやっている、どの公演に行くかを決めるのでさえ大変だった。入場料は高くなかったが、限度はあった。俺はまだ二十歳だったから、入

れるライブハウスも限られていた。

ある時、日本から来ていた新宿二丁目のロック・バー△開拓地▽のオーナーと1時間半ドライブしてパロ・アルトという街までコールド・ブラッドを見に行ったが、俺は未成年だったので、ライブハウスには入れてくれなかった。彼が観ている間、俺は駐車場の車の中で待っていたんだ。

その彼と、同じ街でもう一度ライブに行

では、曲に入ろう。この詞はボズが悪い女にはまってしまった友達にお説教をしているような感じだ。

Baby's into runnin' around  
Hanging with the crowd

▶彼女は遊び回るのが好きだ。いつも大勢とぶらぶらして回る▼。この「runnin' around」は遊びまわっているという意味。そして「hanging」は「ぶら下がっているように」の意味だ。

Putting your business in the street  
Talking out loud

▶お前との間のことを大声で皆に聞かせて回る▼。この「business in the street」は「人には言ってはならぬことを言うように」の意味だ。

Saying you bought her this and that  
And how much you done spent

▶お前が彼女に、あれやこれやを買って

あげたことや、お前がいくら使っちゃったのかをね▼。この「you done spent」は正しい英語ではないけど、スラングで△使ってしまった▽ことをいう。

I swear she must believe  
It's all heaven sent

▶本当だよ、彼女はすべて天国からの贈り物と信じているんだ▼。この「I swear」は神に誓うことではなく、△本当だ▽という意味だ。彼女は、天国から降ってくるように、際限なくお金を使えると思っ

Hey boy  
Better bring your chick around  
To the sad, sad truth...the dirty  
lowdown

▶なあお前、彼女に汚く最低だという悲しい悲しい真実を見せてあげな▼。ここで「Hey boy」は「△おい、情けないぞ▽」というニュアンスも含む。彼女自身に自分が最悪の女だっ

った。今度はボズ・スキヤッグスを観に。スタンフォード大学のユニヴァーサル・アンピ・シアターという野外会場だった。大学だったので俺も入ることができたんだ。それは76年5月23日の日曜日で、チケットは完全に売り切れ状態だった。当時のボズのギターは、去る2月に初来日公演を行なったレス・デューディックだ。

ボズは少し前の2月に『シルク・デイグリース』を発売したばかりで、FMラジオでは大人気だった。当時のアメリカのFM局は選曲者を使わず、DJが流す曲を自身で決めることができた。日本では俺とピーター・バラカンがDJをやっているインターFMみたいな感じかな。そして、クリーヴランドのDJ連中が勝手に「ロウダウン」をヘヴィ・ローテーションでかけた。そのおかげで、レコード会社もこの曲を6月にシングル・カット。つまり、シングルになる前からもうFMラジオではヒットしていたんだ。特にボズが住んでいる西海岸、サンフランシスコ・エリアでは大人気だった。俺たちがライブを観たときはまだシングルになっていなかったが、観客は皆この曲を知っていたと思う。

を続けてはいけな

(Whoooo, I wonder, wonder, wonder  
wonder who)  
Who taught her how to talk like that  
(Whoooo, I wonder, wonder, wonder  
wonder who)  
Gave her that big idea

▶誰なんだろう？ 誰なんだろうな、彼女にそんな口のきき方を教えたのは。誰なんだろうな、彼女にそんな大きなアイデアをあげたのは▼。この「big idea」は「男を騙す生き方」のことを指す。

Nothing you can't handle  
Nothing you ain't got

▶自分で解決できないことじゃない。お前が持っていないものじゃない▼。だから

ボズはアドヴァイスをする。△お前自身で解決できるんだよ。お前の中にあるものでけで▽と。

Put your money on the table  
Drive it off the lot

△お金をテーブルに載せて、駐車場から運転していきな▽。これはアメリカの中古車のCMによく出てくる言葉だ。△なつと車を乗り換えろ▽、つまり彼女とさつと別れるという意味だ。

Turn on that old love light  
And turn a maybe into a yes

△昔の恋の情熱を灯し、もしかしたらを「イエス」にするんだ。もつといい女がどこかにいるぜ▽。恋愛感情の原点に戻って、曖昧ではなくはっきりと肯定できるような別のいい女を探せ、というふうに、友人に忠告している。

Same old schoolboy game  
Got you into this mess

△誰なんだろう。誰なんだろうな、彼女にそんな口のきき方を教えたのは。お前の頭の中にそんな考えを入れたのは▽

Come on back down to earth, son  
Dig the low, low, low, lowdown

△なあお前、地上に戻ってきな。卑劣だつてことを理解するんだ▽。地上に戻れ!! 現実を直視しろ、という意味だ。

You ain't got to be so bad  
Got to be so cold  
This dog eat dog existence  
Sure is getting old

△そんなに悪ぶらなくてもいいんだ。そんなにカッコをつけなくてもいいんだ。こんな共食いのような生き方は、うんざりだ▽。この「dog eat dog」は、自分が成功するためには何でもやる、つまり弱肉強食というニュアンスだ。

You got to have a Jones for this  
Jones for that



This running with the Joneses boy  
Just ain't where it's at

△これをするにもジョーンズ、あれをするにもジョーンズ、こんなジョーンズたちと走り回るつてはだめだ▽。'Jones' はアメリカに多い名前だから、ありふれた家族の譬えとして使われるが、物欲を意味することもある。つまり、ここでもボズは彼女は欲深な女だから巻き込まれてはならないと言っているんだ。ちなみに「Jones」はドラッグ中毒者のヤクが切れてハイな状態から降りてくるときのつらい状況のことを指す場合もある。ほかに「Love Jones」という言葉もあって、これは恋がダメになつて、好きな人と別れるときの苦しみのことを言う。さらには「Keeping up with the Joneses」という言葉もあり、これは例えば回りの人が新しい車を買ったら、自分も買わなきゃと思っ気持ちは指す。他の人と張り合っことを言うんだ。

You gonna come back  
around

To the sad, sad truth  
The dirty lowdown  
(chorus) 前回と同

△子供じみたゲームの延長はお前を複雑な立場にしてみました▽。大人になれ、いつまでも学生みたいに生きていくのはだめだ、と論じている。

Hey son  
Better get on back to town

△なあお前、街に戻ってきな▽。この部分は場所のことを歌っているのではなくて、△現実に戻れ▽という意味で使われているんだ。

Face the sad old truth  
The dirty lowdown

△分かって切っている悲しい真実と向かい合っんだ。彼女が本当に卑劣で汚いということ▽。'old truth' = 古い真実、つまり△分かって切っているはずのこと▽という意味。

(Whoooo, I wonder, wonder, wonder who)  
Put those ideas in your head

△悲しい悲しい真実を、お前はそう理解するようになる。汚くて卑劣だということ▽。ボズは74年の6枚目のアルバム『スロウ・ダンサー』から少しずつメジャーになっていった。今回の曲も、メジャーになったあとの曲だ。彼のファンも少しずつ変化していった。俺が行った76年のライブでは、アンコールの前に72年のアルバム『マイ・タイム』から「ダイナ・フロー」を歌つたら、客が急にトーン・ダウンしてしまつたのを覚えてる。新しいファンは、古い曲を知らなかつたのだらう。その時の空気の変わりようはすごかつた。俺はそのあとのアンコールが「ロウダウン」だつたかは覚えてはないけどね。



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE  
ラジオ・パーソナリティ。  
1956年、鎌倉生まれ。  
18歳で新宿2丁目のロック・バー「開拓地」で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イベントなどのMCでも活躍。  
http://whatsupmusic inc.com